



TITLE:

豊崎稔先生 - 人と業績 -

AUTHOR(S):

寺尾, 晃洋

CITATION:

寺尾, 晃洋. 豊崎稔先生 - 人と業績 -. 経済論叢 1984, 134(3-4): 237-241

ISSUE DATE:

1984-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/134042>

RIGHT:

經濟論叢

第134卷 第3・4号

哀 辭

故豊崎 稔名誉教授遺影および略歴

経営戦略論に関する若干の考察(3)……………降 旗 武 彦 1

シュンペーターにおける「資本主義過程」

の探究……………八 木 紀 一 郎 31

マーケティング・チャネルにおける組織間

管理理論：一つの修正モデル……………高 橋 秀 雄 50

公共企業体としての国鉄の出発……………張 風 波 70

インフレーションの波及過程について……………金 谷 義 弘 90

追 憶 文

豊崎 稔先生——人と業績—— ……………寺 尾 晃 洋 109

豊崎先生と奈良……………小 野 一 一 郎 114

昭和59年9・10月

京都大學經濟學會

追憶文

豊崎稔先生——人と業績——

寺尾晃洋

豊崎稔先生が逝かれた。若い頃に肺の一部を切除されているため、近年冬になると呼吸困難に陥られることが多く、その折は、「ただ、じっとして『こたつ』にうずくまっている」と親しい人に書きおくられている。先生は、自省心の強靱な方であったが、本当によく耐えてこられたと、しみじみ思う。

先生が、経済政策講座の担当者として京都大学経済学部赴任されたのは、あの敗戦の翌年、1946年9月のことであった。1965年3月のご停年まで、約20年間、先生は、研究、教育、大学行政、そして、政府や自治体への政策形成への助言など、ほぼ四つの分野で、文字通り、新しいスタイルの仕事をした。ある意味では、第二次大戦後における大学教授の「もっともすすんだ生活のモデル」を示されたのかも知れない。

先生のご研究は、「日本機械工業の基礎構造」（1941年）によって代表されるが、この書物も、それ以後の先生のご労作も、つぎの二つの基本的な特徴によってつらぬかれている。

さて第一の特徴は、資本主義の発展段階を技術研究の媒介によって、厳密に把握され、しかもそれぞれの段階における経済政策を諸階級の対抗関係をふまえて特徴づけられたことである。先生は経済における再生産と循環をたえず、政策との関連において把握しなければ気のすまない方であった。産業資本、独占、あるいは金融資本、そして、国家独占資本主義などの発展の画期的確につかみ、特有の政策とのかかわりにおいて、企業、産業などの型をえがきだそうとされた。これらには詳細な資料の収集、調査による裏付けがつけ加えられた。先生は、資料の大好きな方で、外国へ出張されたりすると、かならず、一級の資料をみつめてきて、私たちに披露された。アメリカ合衆国の上下合同委員会の資料など、まだ日本にはほとんどなく、アメリカ文化センターに散見されただけの頃に、いちはやく、私たちに教えてくださったのも先生である。また、いわゆる学者でない技術者や、現場の人びとが苦勞して書いた文献をきちんとあつめ、着眼する

のも先生のお得意業の一つであった。「基礎構造」にも、この種の資料が重要なところで登場しているし、先生は、日常のつきあいでも、豊崎セミナーの卒業生を含めて、現場で働く人びとの意見をとても大事にし、企業や行政の職にあつて、いわゆるアカデミズムの世界以外で、経済のことをよく知っている人をいつも大切にされた。

関連して、先生の教育における基本姿勢の一つとして「学閥に全くとらわれない」徹底した態度をあげることができる。先生ほど、いわゆるエリート・コースでない、日のあたらぬところで、こつこつと仕事をする人を学者にまで育てあげられた方は、すくないのではないだろうか？

行政における先生の指導ぶりも、この点にかかわって、きわめてユニークなものであった。先生は、地方労働委員会や大阪労働大学などの育成にもかかわられただけあって、利害の相対立する階層の人びとを論争させながら科学的な問題解決の道を徐々にさとらせ、両者にとってのより大きな社会的障害物をこそ改革するようにたえず助言された。各種の審議会でも、先生の評判がよかったのは、先生の知見、見識の高さとともに全くわけへだてのない態度が多くの人びとの共感を呼んだからであろうと思われる。

もちろん、いまの、このきびしい世の中でこのような態度をとると、しばしば、心よからぬものが先生を利用しようとし、そのために先生は大変な心労を重ねられる、ということもおこりえたわけであるが、そのようなときにも、先生は笑って事後処理をたんと進められるだけであった。

このように、経済や企業や行政の現実を重んじられた先生は、反面、空論が大嫌いであった。「日本の経済学は、経済学でなくて、経済学『学』だからね」とおっしゃって、下手に、実証性のない論文など書くものなら、「絶対に書いちゃいけないものだ」とビシヤリと言われた。私たちの駄作だけでなく、いわゆる「大家」の書いたものでも、この点は全く容赦はなかったから、おそらく、先生は、学界では、かなり、けむたい存在だったのではないか、と思われる。

先生のご労作をつらぬいている第二の重要な特徴は、資本主義の各発展段階を理論化した経済学説を系統的に分析し、総合して、経済理論のあるべき体系を執拗に構想されたことである。

先生が、京大にいられてから、「貨幣的景気理論」（1937年初版）が、1948年に再版され、さらに、「経済変動論」が大巾に改訂されて、1949年に公刊された。景気変動論

は、元来、経済理論であるとともに、たえず、景気安定などの目的のための政策論を考えざるをえないという特質をもっている。先生がつねに景気理論史の原点として、位置づけられていたのは、スウェーデン学派のクヌート・ヴィクセルであった。そして、ヴィクセルの物価安定政策を「中立的貨幣政策」として引きついだウィーン学派にまず注目された。先生は、いわゆるデフレ政策を辞さない人物として、F. A. V. ハイエクをあげ、景気安定のためには、完全雇用政策を主張して、インフレーション政策を辞さない人物として J. M. ケインズをあげられている。インフレ政策といっても、デフレ政策といっても、究極的には資本の再生産と物価の関連をふまえ、物価を左右する重要要因として貨幣供給問題に着目するのが常である。先生は、東北大学の時代に、経済原論の故宇野弘蔵先生と親しい同僚で、「資本論を枕にして寝る」ことの是非を論じられたというくらい、「資本論」にもくわしい方である。したがって、先生の構想は、つねに、再生産過程、物価、金融（あるいは財政）の構造的関係を解明することにむけられた。

現在でもそうであるが、資本主義経済の把握というと、まず、流通と資本の移動を抽象して、抽象的に生産過程をとりあつかい、そのあとで流通を導入し、ついで、資本の移動の契機を入れてきて、各抽象レベルの問題を別々に切り離して論ずることが多い。これは、分析にとっては必要な手続きであるが、経済社会全体の総合的把握にはなりたい。分析された個々の契機を改めて総合しようとするれば、再生産過程を物価水準の動向とかかわらせて検討せざるをえず、所得分配と再生産過程の相互関係を同時に検討しなければならない。また、再生産過程それ自体も、技術や企業的发展とともに、産業資本、独占資本、国家独占資本などのそれぞれの発展段階の規定をうける。これらの諸問題は、まさに、現代経済学の根本問題ともいえる重要な性格をもっており、いわゆる「転形問題」や「多部門分析」の論議において、今日でも論争されている基本問題である。先生は、豊富な学説史の知識と、経済の現実を微細にわたって考究するという姿勢とを結びつけながら、この根本問題にとりくまれた。先生が、京大を退職の折に公刊された「現代資本主義論」（ミネルヴァ書房、1965年）は、この目的のための一つの試論であった。先生はこのなかでつぎのようにのべておられる。「理論構成への道として現実分析をする場合、分析の基本態度の決定について、また理論構成法の決定に際して過去の学問成果がいかなる態度と方法とで理論を形成し、なぜ妥当性を喪ったかを考究しながら、その反省の結果を一応の分析指針とすべきであり、それによって経済研究は

より完全になる。……しかしその場合にも最後の基盤は歴史的現実それ自体である。」
(同上、14ページ)

先生は大阪商大、京大、立命館大学、さらに龍谷大学においても、多くの研究者を養成されたが、その多くは、何らかの形で、この先生の学問的方法論の影響をうけた。先生の指導は、文字どおり、のびのびしていて、先生はテーマをおしつけるとか、自分の研究の下請をやらせるなどのことは決してされなかった。むしろ逆に、ご自分が校閲した場合、必ず、執筆者の名前を並べてかかげ、原稿料は100%執筆者にくれるのが常であった。もっとも、お若い頃は、随分と気性のはげしい方であったと噂されているし、下手にくだらない質問をすると、不機嫌になってこられるので、「しまった」ということも、たまにはあった。

先生は、ひろく、地域で見聞されるのがお好きであった。日本だけでなく、外国へもよくでかけられたが、同伴された奥様のお話では、徹底的に地図をみては、あちこち、あるかれたとのことである。外国からいただいた先生のお手紙には、よく、街や村の風景の印象がのべられているが、とくに、日ぎしの、よくあたたか古典的な情景には、つよく、惹かれておられたように思う。また、海外の文献の動向には、晩年まですごく敏感で、「ブーランツァスの方法をどう思うか」とか、「ゴルトシャイトの復活をどう思うか」とか、たびたび、論談を試みられた。私どもが留学すると、きめ細かく注意を与えたメモや、最近の文化動向などが書きおくられてくことも多く、文化や宗教、美術にも一家言をもっておられた。お住いが奈良で、ゆかりの寺院、陶芸（赤膚焼きがとくにお気に入りであった）家とのおつきあいがしからしめたのかも知れない。

以上、先生の学問研究の方法を中心に、それが先生の人となりとどのようにわがちがたくむずびついてきたかをのべてきた。結びにあたって、先生の一微さを示すエピソードを記しておきたい。先生がおなくなりになったとき、私たちは、先生が一切の叙勲をおことわりになっていたことを知らなかった。経済学部の事務長はじめ、京大本部の事務当局者もわざわざせて申請しようとしたところ、実は、先生は、生前一貫して叙勲を辞退されていたことがわかったのである。私どもは、先生からそのような話をきいたことがなかったし、気がつきもしなかった。いわば、文字通り不肖の弟子たちである。よく考えてみれば、先生は、あの1930年代から40年代の激動期を生き抜かれ、日頃の先生のお考えからすれば、辞退されても、何の不思議もなかったであろうに、これはまた、

また先生にお叱りをうけそうである。

京大をご停年のとき、先生は、奥様とお二人で研究室を片付けられ、私たちをよびあつめて、「何でも好きな本をもってゆけ」と申し渡された。先生の書棚には貴重本が一杯あったから、みな先を争って、拝領してしまったが、ほとんどの書物は、墨字で署名されていた。これらの署名も先生のお宅の表札も、先生以外には絶対にまねのできない“くせ字”で、豊崎稔と書かれていた。あの表札も、もうかかげられないと思うと悲しい。しかし先生が、わかちあたえられた宝物の数々は、いつまでも、人びとの心のなかに生き、伝えられてゆくことを信じて疑わない。先生どうか安らかにお休み下さい。

(1984年9月記)

(記・本稿の作成にあたっては、豊崎先生に京大で指導をうけたかたがたから、多くの資料の提供をうけた。また、これら資料のとりまとめと本稿の執筆について、先生の門下生の一人である池上惇教授から多大のご助力を頂いた。記して厚くお礼を申し上げます。)